

バイオ戦略検討ワーキンググループ（第1回） 主な発言（要旨）

- 上山議員：ターゲット型の科学技術施策はアカデミアの体質を変革できない。システムのマネジメントの視点が必要。リーダー、人材、ポストの再配分、岩盤的な国立大学の研究体制の変革
ライフサイエンス系企業のリスクの判断基準を、公的資金で影響させる。
- 大滝構成員：マネジメントを含めたイノベーションのエンジンが必要、世界への対応、官民投資、マネジメントシステム
ゲノム編集のプロジェクトの横串をいれた連絡会議の設置と協働体制の構築、特に社会的な受容への取り組み
- 宮田構成員：切れ目無いイノベーション創出のための戦略・人材・投資・挑戦とリスクを取る覚悟。良い例として鶴岡のスパイバー社の挑戦。イノベーション支援策の再検討が必要。
何年後を見据えた戦略かの設定が必要。例えば、2030年の市場規模や研究者数等の数値目標が必要。
法制度の点検が必要。例えば、日本だけが遺伝子の特許を認めている。
- 近藤昭彦構成員：研究開発の大きな中核拠点の構築しバイオ戦略のエンジンが必要、人材評価、技術の評価の変革が必要、ビジネススクールと理系の博士、企業の革新的な行動が求められる。
アントレプレナーシップと挑戦する気概。
研究資金の多様性と民間資金のベンチャー企業への投資、行政の規制改革での発展、PMDAの考え方を取り入れた研究開発、ゲノムライトに見られるゲノム合成、ゲノム編集の研究推進と社会的受容
- 近藤一成構成員：ゲノム編集の利用とリスクコミュニケーション、バイオリソースの収集と利用、遺伝子組換え食品の安全性の議論、規制評価側の人財育成
- 坂元構成員：欧米ベンチャーのバイオ×デジタルの取組みをシリコンバレーの投資家は高く評価。
日本のバイオ産業もバイオ×デジタルを用いた研究開発やビジネスの可能性を真剣に考えるべき。
- 水無構成員：バイオ戦略の障害となる社会的規制（バイオマスの確保、健康機能食品、発酵企業の強みと弱み（データ保護））。データの共有の遅れ
バイオへの企業からの取り組み、社内ベンチャーの失敗例の経験を踏まえて、将来性のある研究開発に持続的に投資、目利きとメンター
- 林構成員：人材育成・活用の重要性（オンザジョブトレーニング、在外研究者・産休/育休中研究者等の活用）、アカデミアと企業の交流、データベースの構築と利用、切れ目の無い研究投資の仕組み、政府系ファンドの情報交換
- 門脇参考人：ゲノム編集の社会的受容が重要。バイオ素材の開発には植物、微生物、昆虫、動物などさまざまな生物の能力をいかに引き出すかが重要
- 岩田構成員：データドリブンの育種、ゲノミックセレクション、情報のプラットフォーム、ゲノム編集、データ科学と生命科学の発展、生物学者の数学素養の低さ、多様な植物の利用拡大
- 高田構成員：人材教育。統計学の専門家の育成が必要。
- 山口構成員：イノベーションの大義、国民の支持、消費者の多様な意見の認識とそれを反映した方針の策定。
- 山本（前田）構成員：平均寿命と健康寿命の差が日本食と言われるが、データがない。ヘルスケア産業のために大規模コホートや介入試験が必要。